

チロエ島の教会群／チリの美しい景色

三菱東京 UFJ 銀行 嘉屋本 敦

今年の初めに、ユネスコ世界文化遺産の一つ、チロエの教会群を訪ねてみた。17-18 世紀にイエズス会の布教活動により築かれたとても美しい木造教会で、ヨーロッパと先住民の文化伝統が融合した「チロエ様式」と呼ばれているのは皆様ご存知の通り。

プエルトモンの空港でレンタカーをし、国道 5 号線をチロエ島へ向かう。途中、地図の上では道路が海上を突っ切ってそのままチロエ島内へ続く。少し不思議に思ったが、カーフェリーの航路だと知って納得。全く整備されていない未舗装道路をズンズン進む。せっかく最新 2014 年版のカーナビをつけたのに、多くの教会近くの道路は地図が表示されず、勘に頼っての運転になる。チロエ島からレムイ島に渡り、ダートロードをしばらく走った後、海辺に向かってかなり急な坂を恐る恐る下ると、ひと気のないデティフ教会へ漸くたどり着いた。鍵がかかっている中へ入れない。世界遺産なのに看板もなければ土産屋も食堂もない。しばらく外側から写真を撮っていると、どこからか近所のおばちゃんと思しき人が歩み寄ってきて、「今日はお客さんが多いねえ」と言いながら教会の鍵を開けて中へ入れてくれた。こんなほったらかしの世界遺産、恐らく？、いや絶対ここしかない！

チロエ島およびプエルトモン、プエルトバラス周辺には、教会が 200 以上あると言われており、19 世紀におけるチリの人口は 2 百万人程度を現在の人口比率で引きなおして、当時のチロエ島の住民は 2 万人程度だったと、かなりいい加減に推測すると 100 人に対して 1 件の教会がある計算だ。行きつけの美容院といった割合だろうか。イエズス会、恐るべし。2 日間で世界遺産に登録されている 14 の聖堂の内 12 か所を巡り、小さな教会を含め合計で 50 余りの教会をカメラのファインダーに収めた。うろこ状の木板を重ねた外壁に、黄色、緑、ピンク、スカイブルーと色もとりどりで、尖塔の形もバリエーションが多く、これだけでちょっとした写真集が出版できそうだ。

世界遺産といえば、2014 年の 6 月に、チリ、アルゼンチン、ボリビア、コロンビア、エクアドル、ペルーにまたがる古代インカの道「カパック・ニャン (Qhapaq Nan)」を 6 か国共同で世界遺産に登録した。インカ帝国により建設された全長 3 万キロに亘る伝説の道は、首都クスコとその周縁部を結んでいた。貿易商や軍隊などインカ帝国の約 4 万人に利用され、後にスペイン人による南米大陸の征服にも使われたという。ネットで写真検索すると、様々に表情を変える道程はとても美しく、いかにも旅愁を誘いそうだ。この世界遺産登録は、関係国が政治的なしがらみを超えて協力しあった好事例で、文化・経済・観光を問わず、こうした協力関係はどんどん実現して欲しい。

サンチャゴのセントロにも歴史の息吹を感じる建物がたくさんあるが、その多くが落書きされたり放置されたりしている。チリは、せつかく観光資源が沢山あるのに、うまく活用していないのは少しもったいないと思う。蛇足ながら、個人的にサンチャゴで一番好きな景色は、時折見せる夕焼け空だ。コスタネラセンターとサンクリストバルの丘をシルエットに、真っ赤に焼ける夕日の美しさは、世界遺産ものだと思っている。





※この記事は、カマラ会報 236号（2014年11月発行）に掲載されました。